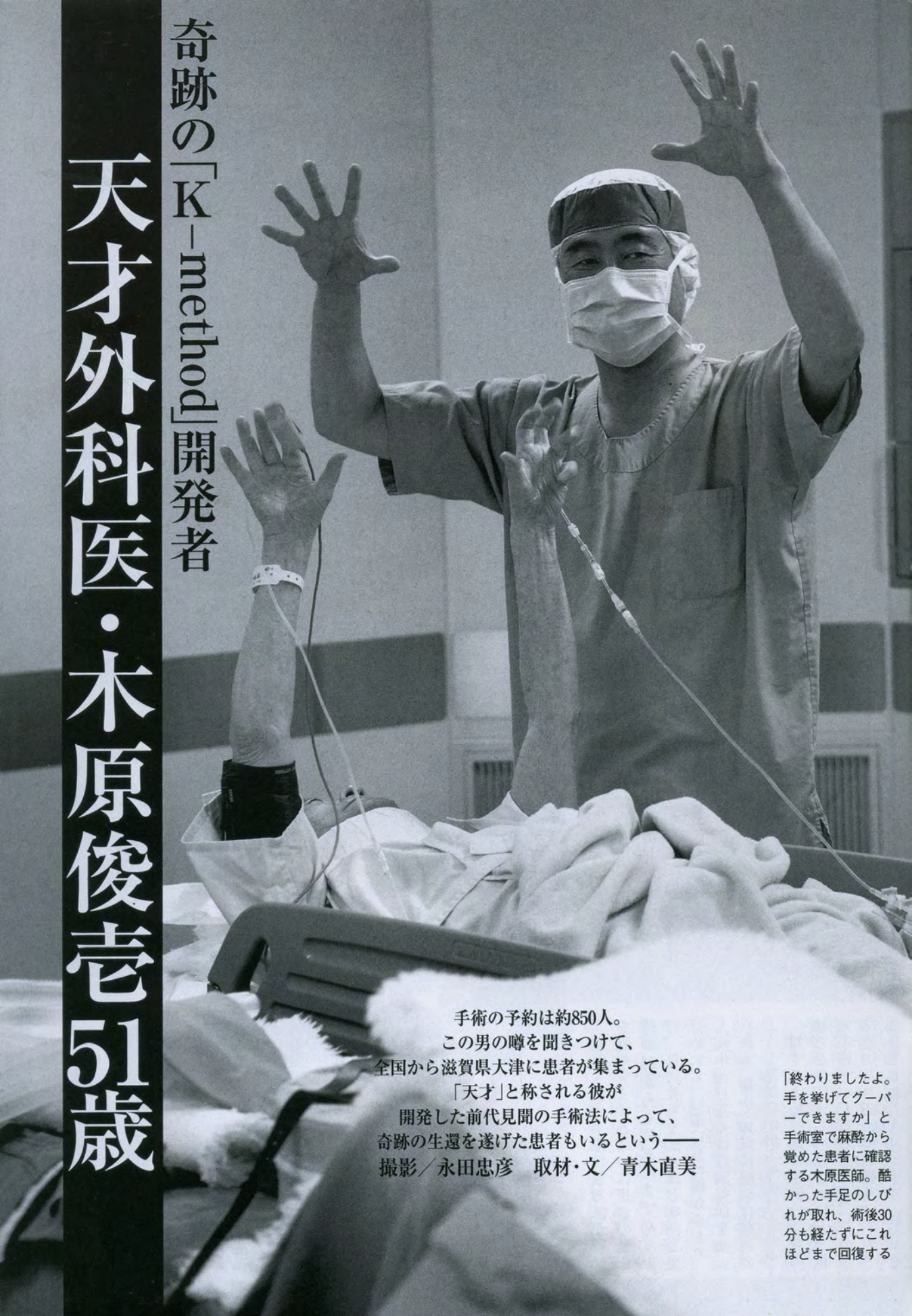


天才外科医・木原俊壱 51歳

奇跡の「K-method」開発者



手術の予約は約850人。
この男の噂を聞きつけて、
全国から滋賀県大津に患者が集まっている。
「天才」と称される彼が
開発した前代見聞の手術法によって、
奇跡の生還を遂げた患者もいるという——
撮影／永田忠彦 取材・文／青木直美

「終わりましたよ。
手を挙げてグーバ
ーできますか」と
手術室で麻酔から
覚めた患者に確認
する木原医師。酷
かった手足のしび
れが取れ、術後30
分も経たずにこれ
ほどまで回復する

全国から続々と患者が訪れる理由

2時間、3cmの傷で 終了する 前代見聞の手術法

「外来に来られるのは、肩が上がりにくい、首や後頭部が痛い、手足がしびれて歩けない、腰が痛いなどの症状を持つ方です。年のせいだと思っていた症状がじつは首に原因がある、自分では腰が悪いと思っていても、検査すると首に原因がある場合が多いんですよ」

覆す独創的な頸椎の手術法「K₁ method」を開発した大津市民病院 脳神経外科の木原俊彦医師、51歳。難易度が高く、術後に麻痺や痛みなど重篤な合併症が出ることも多いことから日本では専門家も少なく、「首の手術は下手に受けないうほうがいい」が脊椎手術の常識だ。怖さで手術に二の足を踏む患者もいれば、合併症が出ても「寝たきりにならなかつたのだから」で片付けられてしまう現実もある。

ところが、木原医師の手術を受

けた患者は「これが首の手術なの？」と驚く。口コミで広まり、現在の待機患者は約850人。「3年半待ち」が続いている。一体、何がどれほど違うのか。



91歳の今もハイヒールで外来を訪れる伊東綾子さんは「神経の圧迫がひどく、転んだら全身麻痺の可能性がある」と言われ、80代で手術

通常、首の手術は執刀医が術部を見やすくするために患者の髪を後頭部からもみあげまで刈り上げ、首の後ろを20cmほど切開して行われる。回復にも時間がかかり、入院中10日近くは点滴生活を強いられる。術中、神経に触れば前述のような後遺症が出る可能性もある。

対する木原医師の手術は、首の後ろを切開するのは3cmほど。鍵穴手術といわれるもので、首の下部を切るため頭髪の剃毛は不要。改良を重ねたオリジナルの器具を

手術を受けたト部昭直さんに、無事に終わったことを告げる木原医師。「もう手術終わったの？」とト部さんは驚いたように何度も訊ねていた



毎週水曜日は、朝8時から放射線科と合同のカンファレンスを行う。手術の適否、合併症の問題など、若いスタッフの疑問を検討する

奇跡の「K-method」開発者
天才外科医・木原俊彦51歳

(写真右)オリジナルの開創器。マリリンモンローが脚を組んでいるような先端が特徴。(写真左)切開した皮膚は縫わずに水糊状の医療用ボンドを上から塗るだけ

木原医師が開発した人工骨「K-Spaser」はミクロの穴が開いており、次第に自分の骨と一体化していく。耐久性はなんと100年

用いることで、筋肉も切り込まず、血管や神経を一切傷つけずに、脊髄を保護する骨を人工骨に取り替えて正常な形にすることを可能にした。その結果、出血量は50ml以下。手術時間も1時間半から2時間と短い。これまで5000例以上行い合併症が出たことはほとんどない。手技の緻密さ、患者にやさしい方法は何かから何まで型破りで、術後の覚醒も驚異的だ。

変形性頸椎症で4つの人工骨を埋め込む手術を受けた下部昭直さん(84歳・神奈川在住)は「無事終わりましたよ」と手術室で声を掛けられると、「もう終わったの？足が軽くなった」としきりと両足首をくるくる動かし始めた。

「神経の圧迫が強いほど劇的によくなります。首が悪い方は、常に足がしびれているので、足裏に感覚が戻るとうれしくて、だいたいあのように足を動かされますね」

集中治療室に入る必要はなく、術後は病室へ。点滴はひと晩。翌朝の血液検査とレントゲン撮影で問題がなければ、歩くりハビリが始まる。希望すれば外出も可能だ。

「座ってテレビを見る前屈みの姿勢が一番首に悪い。寝てるより動いたほうが合併症も予防できるので、たいいていの方が京都へ観光リハビリに行かれます」と木原医師。異状がなければ7日で退院となる。

神業を持つ医師の素顔

患者さんが経営する京都の料理店「安参」にて。よく通る声と明るくおらかな対応も患者が安心と信頼を寄せる理由だ。「大きな声でどこでもしゃべるからすぐわかる」と言われます（笑）



本当は 映画監督に なりたかった

外科医としての抜きんでたセンスを持ち、名医と称される木原医師だが、当の本人は「自分は落ちこぼれ」だと笑う。

高校時代は映画監督に憧れて大学受験は芸大ひと筋。三度目の正直で受かったのは、映画監督科ではなく医学部だった。

「筆記試験に合格し、面接に行ったとき、つい芸大の感覚のまま、

破れたジーパンに革ジャンを着て行ってしまったら、周りはネクタイにスーツの人ばかり。『あんなふざけた格好で来た奴は後にも先にもお前だけだ』と未だに言われます」と苦笑する。入学できたのも、「これからの医者はこういう型破りなのが必要な時代が来るから」と、後に教育係となった先輩が推してくれたおかげだと聞かされた。

転機になったのはアメリカ留学した際、脊椎の手術に魅了されたこと。それまでは、脳神経外科の

救命救急の現場が長かった。どんなに努力しても患者は植物状態になり、悲しい最期を迎える様を、数多く目にしてきた。無力さと辛さを感じるばかりだったという。

「ですが今は、脊椎外科として『K-method』という手術法を開発し、自分が

頑張った分だけ患者さんが元気になり一緒に喜ぶことができる。医者として本当に救われる思いです」と木原医師は振り返る。だから「患者さんにとって一番いいことを最優先して考える治療」というまなざしがぶれることはないのだろう。アイデアを形にする巧さは、子どもの頃からのものだった。幼稚園の時には、水彩絵の具にサラダ油を混ぜた「油絵」を描いて入選、高校時代には、ビニールハウスのビニールで気球をつくり、糊殻を燃料に犬を乗せて飛ばして

新聞紙面を飾ったこともある。映画監督の夢然り、独創的で豊かな発想力がベースにある。

日本式のトレーニングを受けずに、独自の「K-method」を始めたことで、当初「脊椎手術の常識を知らない」と叩かれたこともある。だが、何を言われても、木原医師が一貫して目指していたのは「患者のため」のよりよい手術だ。

頸椎を削るタ

木原医師の手術を受けて元気になった全国各地の患者から、感謝の手紙が届く。木原医師の外来は火曜日のみ。「他の日は毎日朝から晩まで手術です」





医局で他のスタッフと机を並べる。「家には仕事を持ち込みたくないで、原稿や資料の作成はここでしています」



イヤモンドバーの回転を、難所によって足で踏み換えながら回転数を微調整。バーが熱を持ってきたら、水でぬらしたガーゼでこまめに冷やすといった独自の工夫が加えられていった。

「ちょっとしたことです、コンマ何mmの世界ですから、バーの振動と熱が神経に伝わる程度によっても治療結果を分けると僕は思っています」

手術は技術だけでカバーしてしまうと思われがちだが、それを最大限に活かすには、使用する器具も大事だと木原医師は言う。独自の手術器具や「K」

大津駅から車で10分。入院部屋の窓からは、すぐそばにある琵琶湖が一望できる

「スペーサー」などの人工骨の開発も続けている。

この手術を始めて13年。無駄な操作をなくすことで、手術時間を短縮し、より患者の負担が減るよう、改良を続けているが、自分の中での完成度は「まだ50%」。新しいアイデアは、手術していると自然に湧いてくるという。

今後の課題は後進の育成だ。経験を積み7〜8割は似たようにできる可能性があるが、残りの2〜3割は感性や瞬時の判断に委ねられる。難しい手術ほど、そのウエイトが大きくなるのだと木原医師は語る。

「スポーツ選手でも、技術はあるのにここの一番で決められるかに差が出るのは、そこだと思っんです。経験は大事ですが、経験だけでも技術だけでも意欲だけでも駄目」

そんな木原医師が認める愛弟子は、静岡県立総合病院の高山柄哲医師と、現在大津市民病院で一緒に働いている整形外科の下村隆敏医師だ。

「僕、日常はぐうたらなんです。家族には、ちゃんと手術できているか心配されます。家で仕事の話はしないので、子どもは僕のことを内科医だと思っているらしくて。まあ、医者だとわかってはいるだけでもホッとしましたけど(笑)」

木原マジックで救われた患者たち



四肢が固定されたまま、飛行機でベトナムから関空へ搬送された様子。これほどまでに回復したかと言えない（木原医師）という

きた画像を見ても、性もある。送られてきた画像を見ても、

「脊髄は動かなくなつてしまっていたらまず元には戻らない。日本に搬送する間に、さらに悪化する可能性もある。送られてきた画像を見ても、



右が米田さん。リハビリも兼ねて、毎朝、30kgのベンチプレスと腹筋200回、琵琶湖畔を50km自転車で行っている

田さんが、頸髄を損傷する事故に遭ったのは2年前。仕事のため、ベトナムで大型機

脊髄を損傷したら元には戻らない。そう言われる中で、奇跡の回復を遂げたのが京都で貿易会社の社長を務める米田多智夫さん（70歳）だ。珍しい商品を探して世界各地を駆け回る米

全身不随から奇跡的に生還した会社社長

オーシャン貿易株式会社 米田多智夫さん

械の運転中の出来事だった。意識はあったが、首からは感覚がない状態。思い出したのは、1年前に友人から聞いた「見事な頸椎の手術をする先生がいる」という木原医師の話だ。

「すぐに家内と会社のスタッフに連絡を取るよう伝えました」

だが、診察券もなければ、先生の顔も知らない。手術で忙しい先生と話ができたのは、3日目のこと。木原医師は「できるならやらないでおきたいという心境だった」と当時を振り返る。

手術を受けるなら現地でしたほうがいいと何度も話しました」

それでも連日必死に木原医師に頼み込む奥さんに

「もし寝たまの水平な状態で運べたら考える」と伝えた。実現は難しいと思っていたからだ。ところが、商社マンの米田さんはすぐに飛行機をチャーターして帰国。病院のスタッフは最後まで止めたが、事故から10日後、木原医師の最終的な判断で手術を受けることになった。

「100%厳しいと判断すれば手術しません。ご家族の熱意に絆されてというより、症状を見て、手術で多少はよくなるかもしれないとわずかな可能性を感じたんです」

3時間におよぶ手術を終えたあと、ぎこちないながらも確かに足



手術を受けるなら現地でしたほうがいいと何度も話しました」

それでも連日必死に木原医師に頼み込む奥さんに

「もし寝たまの水平な状態で運べたら考える」と伝えた。実現は難しいと思っていたからだ。ところが、商社マンの米田さんはすぐに飛行機をチャーターして帰国。病院のスタッフは最後まで止めたが、事故から10日後、木原医師の最終的な判断で手術を受けることになった。

「100%厳しいと判断すれば手術しません。ご家族の熱意に絆されてというより、症状を見て、手術で多少はよくなるかもしれないとわずかな可能性を感じたんです」

3時間におよぶ手術を終えたあと、ぎこちないながらも確かに足



退院日に木原医師と記念撮影。この日は、小椋さんの64回目の誕生日だった

術後6日でコンサートの舞台に

歌手 小椋佳さん

が動いた。「これは大丈夫やと手術室で歓声が湧きました。僕自身ここまで動くという確信はなかった」と木原医師も驚く結果だった。

米田さんは、懸命のリハビリで10日で杖をついて歩くまでになり、2ヵ月半で退院。左手に多少麻痺が残るが、杖なしで歩行が可能

木原医師のもとには多くのスポーツ選手や著名人も訪れる。歌手の小椋佳さん（67歳）も3年ほど前に首の手術を受けた一人だ。

「友人が木原先生の手術を受けて

劇的によくなり、しきりと勧められたのが最初です」

左肩が上がらず、痛むようになっていた小椋さんは、「まさか首とは関係ないだろう」と思ったが、先の友人にさらに強く勧められ木原医師のもとを訪ねた。26歳の頃、車が2回転する大きな交通事故に遭い、ひどいむち打ちを経験していた小椋さんは、それ以後、「疲れが出る」と何となく首に問題があるような気がしていた」という。

「検査をしたあと、首は脊髄損傷になってしまったらまず元通りにはならない。首の手術は予防的にしかできないという説明を木原先生から受けて、やらなくちゃという気になって。その場で手術の予定を組んで頂いたんです」

手術は人工骨を入れて神経の圧迫を取るスタンダードなもの。3時間の手術を終えると、左肩の痛みは一切なくなった。

「手術の翌日からはタバコを吸っ

に。現在は毎朝1時間半のトレーニングをこなせるまでに回復している。

「あのままベトナムで手術してい



おぐら・けい／1944年東京生まれ。日本勧業銀行（現みずほ銀行）を経て、シンガーソングライターに。'01年には、胃がんの手術を受けた

たら、うまくいって車椅子。それが今は自分で何でもでき、世界30カ国を飛び回る生活に戻れた。九死に一生を得たと思っています」

ていましたから、首の手術はこんな簡単なのかと驚きました」

2日目からは、リハビリも兼ねて大津周辺の散策に出掛けた。

「入院中、家内と雪の大津を楽しみました。お寺巡りをしたり、おいしいそうなお店を探して鍋料理を頂いたり。胃がんの手術をした時はしばらくしつかりした声が出なくて歌える曲も限られたのですが、この時は歌うことにまったく支障はなかったですね」

6日目に広島でコンサートの予定があり、繰り上げ退院。無事にステージを務めた。

3年経った現在では「手術を受けたことを忘れている時間のほうが多いぐらい」だと小椋さんは語る。それからというものの、腰や肩に不調がある人に遭うと、「すぐに大津に行つたほうがいい」と木原医師を紹介し、すでに手術の友が東京に5、6人いるという。

「僕よりひどい症状の人が多かったので本当に助かったと感謝状を頂きました。すねに傷持つ者達の集まりならぬ、首に傷持つ者達の集まり。『木原先生の手術を受けた仲間たち』と称し、よく集まつてお酒を楽しんでいます」



何より人が好きなんです。
治った患者さんが
喜んでくれることが
とにかく嬉しくて

きはら・しゅんいち／1960年福岡県北九州市生まれ。佐賀大学医学部卒業後、米国ロマリダ大学留学などを経て、'99年より大津市民病院へ。剣道は四段錬士と、道場を開ける腕前を持つ

※木原医師のホームページ<http://www.eonet.ne.jp/~kihara/>では、メールによる患者からの質問も受け付けている